

第4分科会

自大学の文脈を踏まえたFDの企画・運営

報告者

高森 智嗣（福島大学 総合教育研究センター 准教授）

岩崎 千晶（関西大学 教育推進部 准教授）

物部 剛（京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室 事務長）

コーディネーター

村上 正行（京都外国語大学 マルチメディア教育研究センター 教授）

参加人数

61名

大学でFDを進める上において、自分の大学にあったFD研修を企画・運営していくことが重要となる。そのためには、大学の中にある情報の共有、問題の確認、教員と職員との連携・相互理解などが必要となる。

本分科会では、報告者による大学のFD研修の事例を紹介した上で、ワークを通して自分の所属する大学の文脈を考慮したFD研修の企画を行い、運営について考える。

〈第4分科会〉

自大学の文脈を踏まえたFDの企画・運営

1. 本分科会の目的

近年、大学教育に対する関心や社会的な要求が非常に高まっており、大学の存在意義が問われている。2008年4月から大学の学士課程教育においてFD（Faculty Development）が義務化され、大学においてさまざまな取り組みが行われている。大学教員は教育が重要だと理解しながらも、FDに対して忌避感をもっている場合もある。そのため、FD研修を企画する際には、企画する側の目的を満たす必要があると同時に、参加する教員のニーズに合わせて、教員が興味を持ってもらえるように心がける必要がある。ただ、他大学における優れた事例をそのまま参考にするには難しい場合もある。そこで、FD研修を企画、実施する際に重要になるのが、自分の大学や授業などの文脈への適用である。自分の大学にあったFD研修を企画・運営していくためには、大学の中にある情報の共有、問題の確認、教員と職員との連携・相互理解などが重要となる。

そこで、本分科会では、報告者による大学のFD研修の事例を紹介した上で、ワークを通して自分の所属する大学の文脈を考慮したFD研修の企画を行い、運営について考えることを目的とした。

2. 本分科会のスケジュール

午前は、FDの実践についての話題提供とした。国立大学教員、（大規模）私立大学教員、私立大学職員の立場から、それぞれの大学で行っているFDの取り組みを紹介していただき、どのようにFDの企画や運営に関わっているのか、ということ話を話していただいた。

午後は、昼休みに回収した質問票に対して話題提供者に回答してもらい、コーディネータから、中小規模私立大学の事例を紹介した。そして、教員、職員に分かれて4人グループをつくり、ワークシートを埋めながら、各大学のFDの実践、利点、問題点について情報共有を行った。続いて、今日のグループワークの結果や講演を聞いた上で、「現時点で考えられるあなたの立場でできる大学のFD活動の企画・改善案」について考え、共有した。最後に、ジグソーメソッドに基づいて、教員、職員が混ざる形でグループを再編成し、FD活動の企画・改善案について説明し、新たな視点での意見をもらった上で修正した。



○午前

10:00～10:10 趣旨説明

10:10～11:55 話題提供（1人35分）

・高森智嗣氏（福島大学 総合教育研究センター 准教授）

「福島大学におけるFD ―FD宿泊研修を事例に―」

・岩崎千晶氏（関西大学 教育推進部 准教授）

「大規模私立大学におけるFDの企画・運営を考える」

・物部 剛氏（京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室 事務長）

「京都産業大学におけるFD／SDの取り組みについて」

11:55～12:00 午後に向けて

○午後

- 13:00～13:30 質問票による質疑応答
- 13:30～13:40 京都外国語大学のFDの事例紹介
- 13:40～15:25 自大学のFDを企画するワーク
 - 13:40～13:50 自己紹介
 - 13:50～13:55 ワークシート記入（大学で実施しているFD活動の内容・利点・問題点）
 - 13:55～14:20 グループ内で共有
 - 14:20～14:25 ワークシート記入（大学のFD活動の企画・改善案）
 - 14:25～14:50 グループ内で共有
 - 14:50～14:55 グループを再編
 - 14:55～15:25 大学のFD活動の企画・改善案について発表、改善
- 15:25～15:30 まとめ

3. 本分科会の午前の内容

まず、最初に、コーディネーターの村上より、本分科会の趣旨と目的、スケジュールについて説明した。続いて、話題提供として、3大学の事例報告をしていただいた。

最初に、国立大学教員の立場から、高森智嗣氏（福島大学 総合教育研究センター 准教授）に「福島大学におけるFD ―FD 宿泊研修を事例に―」というタイトルで報告していただいた。まず、大学全体、学類（学部相当）、個人という3つの意識があること、そのバランスを考慮しながらFDを設計していくことの重要性について述べられた。福島大学の紹介、FD体制の説明があり、実施しているFDの取り組みについて全学、学類、個人に分けて紹介された。そして、それらの取り組みを関連付ける事例として、FD宿泊研修において授業アンケートの改善について検討された内容が紹介された。

FD宿泊研修は「福島大学に所属する学生と教職員が一堂に会し、授業改善等の大学教育の質の向上について1泊2日の期間、集中的に話し合う機会を設けることで、学生の声を取入れた教育改善、大学づくりを進めることを趣旨とした全学FD」であり、制度を変えるポテンシャルが過去の実績からあると考えられていた。今回は全学の課題をFD宿泊研修で検討する構造として、授業アンケートをテーマにすることにし、FD宿泊研修の概要としては、講師から学内外の現状について解説があり、具体的な授業アンケートの活用方法についてのグループワークを行った。その成果として授業アンケートの設問の改訂を検討し、活用の促進としてローデータを教員個人が扱えるようになったこと、アンケート結果に基づくフィードバックレポートの作成が導入されたこと、などからFD宿泊研修の有効性が語られた。



最後に、「学類によって特性が異なる」という意識が根強く、既存の取り組みを活用しながら位置づけなおすことでFDを進めていくことが重要であり、「自律性をいかに「全学」に還元するか」ということが今後の課題であると述べられた。

2番目の話題提供として、私立大学教員の立場から、岩崎千晶氏（関西大学 教育推進部 准教授）に「大規模私立大学におけるFDの企画・運営を考える」というタイトルで報告していただいた。関西大学、教育推進部及び教育開発支援センターの構成について紹介があり、さまざまなレベルでのFDの取り組みについて説明された。まず、セミナー形式として、全学を対象としたFDフォーラム、学部単位で行う教授会での話題提供について紹介された。次に、レクチャー&ワークショップ形式として、新任教員研修、日常的FD懇話会、ランチョンセミナーについて紹介があった。日常的FD懇話会、ランチョンセミナーについては全学の教職員を対象としており、教育学習や授業改善に関する身近なテーマを扱い、参加者が気軽に参加できるように工夫がなされている。

続いて、授業コンサルティング、授業アンケート、補助金事業の運営、学内研究費について説明された。Teaching and Learningの支援として、初年次教育にグループワークのファシリテーションを行うラーニングアシスタント（学部生スタッフ）の導入、授業外のALを支える学習環境であるラーニング commons の構築、ライティングセンターの設置、ループリックの開発、アクティブラーニングの評価、などの取り組みがなされている。

最後に、刊行物・メルマガについて紹介があり、「グループワークの達人」や「ループリックの使い方ガイド」といった冊子の作成、Web ページやメルマガなどによる情報提供などの取り組みについて説明があった。

まとめとして、FDにはTeaching and Learningの視点が必要であり、改善する行為主体は教員だけではなく、学生スタッフや学生自身も重要であること、学習支援への展開も考慮したFDを考えることが課題であることが述べられた。

3番目の話題提供として、私立大学職員の立場から、物部剛氏（京都産業大学 教育支援研究開発センター 事務室 事務長）に「京都産業大学におけるFD／SDの取り組みについて」というタイトルで報告していただいた。京都産業大学、教育支援研究開発センターの紹介のあと、京都産業大学のFDの特徴として「対話」を重視していることが説明された。授業アンケートの改変として「教員－学生間の授業に関する対話シート」を導入し、授業の進め方に関する対話、フィードバックを行うようにした。また、学習成果実感調査を実施し、学生の状況を把握して学部でのFDやカリキュラム改善に活用することを目指している。

また、「学部まわり」として教育支援研究開発センターの教職員が各学部などを訪れて意見交換を行い、「セラデス勉強会」という学長・副学長などの大学執行部と教育支援研究開発センター教職員で行う勉強会を実施している。

職員の関わりとして、担当事務職員による情報収集、情報共有の重要性が説明され、情報に基づいて研修会を実施する流れを構築していることが説明された。そして、アクティブラーニング事例集と授業の工夫に関する全学共有を目的として、2016年度の全学FD／SD研修会を企画、実践したことの紹介があった。

まとめとして、教育・研究の企画・実施においては、それらの理解をもった事務職員の存在と育成が重要な課題であること、教職協働の風土を育成してきていること、教育改善のために、事務職員の「大学職員」としてのさらなる能力向上が必要であるとの認識の上、SD活動を推進していくことが今後の課題であること、が述べられた。

4. 本分科会の午後の内容

午後は、まず、午前のお話提供の内容について質問票に基づく質疑応答を行った。

続いて、村上より京都外国語大学のFDの取り組みについて紹介した。大学及びFD委員会の組織の紹介、FDの取り組みとして、授業アンケート、授業担当者打ち合わせ回、宿泊FD、学内FDについて説明した。特に学内FDにおける授業実践を紹介するポスターセッションについて説明し、学内の情報共有が重要であること、伝達講習と相互研修を組み合わせで設計したFD研修が有効であることについて紹介した。

そして、教員、職員に分かれて、4人グループをつくり、グループワークを行った。自己紹介を行った後、個人ワークとして、ワークシートに「あなたの所属している大学で実施しているFD活動、長所、問題点」について書いてもらった。そして、協同学習の手法である「Think Pair Share」について説明してこの活動

の意義について理解してもらった上で、グループで情報共有をしてもらった。

次に、ワークシートに「現時点で考えられるあなたの立場でできるFD活動の企画・改善案（前にあげた課題について解決策、新しいFDの企画など）」について書いてもらい、グループで情報共有を行った。そして、ジグソーメソッドの解説を行った上で、4グループをシャッフルする形でグループを再編し、教員、職員が混ざるグループを作成した。そして、大学のFD活動の企画・改善案について発表し、意見を出し合うことでそれぞれのアイデアについて改善を行った。

最後に登壇者からまとめのコメントをいただき、今後、参加者が自分の大学でFD実践を企画、運営する上で本分科会の内容を活かしていただきたい、ということを伝えて、終了した。

5. 本分科会のまとめ

本分科会では、国立大学教員、私立大学教員、私立大学職員という3つの立場からFD実践の取り組みについて紹介していただくことで、参加者自身に近い立場に共感してもらうこと、違う立場からの見え方を知ってもらうこと、など、多様な観点からFDを考えることを意識した。また、グループワークを通して、7名程度の他大学の教員、職員とFDに関する取り組みや改善案について紹介し合うことになり、複数の他大学の事例を知ることによって、自大学のFDの取り組みを相対化してもらうことをねらった。そして、自大学の特徴、文脈を踏まえた上でFDの取り組みを考えることができるようになったと思われる。また、実際にThink Pair Shareやジグソーメソッドを体験することで、授業方法のあり方についても考える機会を提供できたと考える。

参加者にとって、今後、自大学の文脈を踏まえたFDの企画・運営を行うことの助けになれば幸いである。

コーディネーター 村上 正行（京都外国語大学）

大学コンソーシアム京都 第22回FDフォーラム 第4分科会

自大学の文脈を踏まえたFDの企画・運営

京都外国語大学
マルチメディア教育研究センター
教授 村上正行

masayuki@murakami-lab.org

Twitter ID: @munyon74

<https://www.facebook.com/masayuki.murakami.14>



大学への社会的要求

大学に対する社会的な要求は年々高まる

↓
大学の存在意義が問われている

- 文部科学省中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(2012年8月28日)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm

文部科学省中教審答申 質的転換答申(2012年8月)

このような時代にあって、若者や学生の「生涯学び続け、どんな環境においても“答えのない問題”に最善解を導くことができる能力」を育成することが、大学教育の直面する大きな目標となる。

このような学士課程教育の質的転換の前提として、学生に、授業時間にとどまらず授業のための事前の準備や事後の展開などの主体的な学びに要する時間を含め、十分な総学修時間の確保を促すことが重要である。

FDとは

- 教授団の資質改善・開発(有本 2005)
 - 広義: 広く研究、教育、社会的サービス、管理運営の各側面の機能の開発であり、それらを含む組織体と教授職の両方の自己点検・評価を含む
 - 狭義: 主に諸機能の中の教育に焦点を合わせる。教育に関するFDは総論的には教育の規範構造、内容(専門教育と教養教育)、カリキュラム、技術などに関する教授団の資質の改善を意味する

FDの類型化(田中 2006)



FD研修の企画の課題

- 大学教員は教育が重要だと理解しながらも、FDに対して忌避感をもっている場合も
- FD研修を企画する際、下記の2点をおさえる必要
 - 企画する側の目的を満たす
 - 参加する教員のニーズに合わせて、興味を持ってもらう

↓
自分の大学や授業などの文脈への適用が課題
他大学における優れた事例をそのまま参考にすることは難しい場合も

FD研修の企画における提案

- 伝達講習で一般的な大学教育に関する知識を獲得した上で、
相互研修で自大学の文脈に根づいた取り組みに関する情報を共有し、議論する



分科会の目的

- 大学でFDを進める上において、自分の大学にあったFD研修を企画・運営していくことが重要となる。そのためには、大学の中にある情報の共有、問題の確認、教員と職員との連携・相互理解などが必要となる。
- 本分科会では、報告者による大学のFD研修の事例を紹介した上で、ワークを通して自分の所属する大学の文脈を考慮したFD研修の企画を行い、運営について考える。

京都外国語大学 FD委員会

- 現在の形式は2007年より
- 委員は15名前後
 - 10名前後の教員
 - 5名前後の職員
- 基本的には教員が中心で議論を進めるが、職員も議論に参加



お互いの立場を考えることの重要性

京都外国語大学 FD委員会

- 年に5回程度の委員会を実施
 - 9月の宿泊FDの企画・運営
 - 2月の学内FDの企画・運営
 - 年2回の授業評価アンケートの実施
 - その他、研修会の企画・実施

授業アンケート

- 2003年度より開始
- 2006年度、2014年度に改善
- <http://www.kufs.ac.jp/about/projects/fd.html>
- 6月、12月にアンケートを実施
 - だいたい11回目前後の授業時となる
 - 学生の学習に関する質問項目を追加
 - 自由記述には2つの設問を準備
 - 満足度(5件法の最終項目)の回答理由
 - 授業に対する感想
- 対象となる授業は、ほぼすべて授業
- 毎学期ほぼ100%の授業で実施

授業担当者打ち合わせ会

- 3月上旬に、学内で1日かけて実施
- 専任教員に加えて、非常勤講師も参加
- 非常勤講師に大学を理解してもらうとともに、参加者で大学全体の授業の問題について考える
 - 午前: 学科毎のFD (カリキュラムの説明、問題点の共有、議論)
 - 午後: 全体会 (学長や教務部長などから大学教育に関する説明)
 - 夕方: 講演会・研修会など (英語教育、初年次教育に関する講演・研修など)

宿泊FD

- ・現在9月中旬(秋学期が始まる1週間前)に、1泊2日でホテルにて実施
- ・基本的に専任教員が全員参加

・初日の午後

- － 外部講師による基調講演(カリキュラムデザイン等)
- － 学内教員によるパネルディスカッション(学内プロジェクトの進捗状況の報告による情報共有、議論)



宿泊FD

・初日の夜

- － ラウンドテーブル(教員がテーマを決めて自由に議論できる場を提供)



・2日目

- － 5つの分科会を設定し、3名程度の教職員による報告、自由討論(到達目標・情報コンテンツ・入学前教育・学生参加型活動・授業評価の活用 etc.)



学内FD

- ・学内FDは2月下旬～3月上旬に、大学内で実施
- ・基本的に専任教員が全員参加
- ・2時間程度の時間で行っている
- ・数名の教員が発表＋グループディスカッション
- ・宿泊FDから継続的に議論されるテーマが多い(授業アンケートを活用した授業改善、メンタルヘルス、授業映像を用いた授業改善)

学内FDでのポスターセッション

- ・これまでのFDでは、教員同士がお互いの授業実践について情報を共有し、議論する機会はそれほど多くないのが現状
- ・授業実践に関するポスターセッションを企画
 - － 教員が自分自身の授業実践における工夫や問題点を広く発表
 - － 関心をもつ教員が質問、議論する機会を提供

学内FDでのポスターセッション

- －「あ、他の先生もこういうことに悩んでいるんだな」
- －「こういう工夫をしているのか」

といった、授業に関することを教員同士で共有し、議論することで、自分自身の授業の振り返り・改善につなげてもらうことを目指す

他大学の実践紹介

- ・人文系の大学であるため、ポスター発表のイメージが分からない教員も多い



- ・広報時には他大学の事例を紹介

- － 徳島大学
<http://www.cue.tokushima-u.ac.jp/fd/article/0000596.html>
- － 大学コンソーシアム京都
<http://www.kyoto-fd.jp/poster.html>
- － 関西地区FD連絡協議会
http://www.kansai-fd.org/activities/meeting/20100424_peer-review.html

ポスター発表の募集

- 先生方の日頃の取り組みを紹介してほしい、困っていることがあれば、ぜひそこで議論してほしい、ということを強調して広報
- メールや個別のお願いなどにより、9名の教員(1名はネイティブ教員)が発表
- ポスターの形式は自由としたが、PowerPointのテンプレートを作成して配布

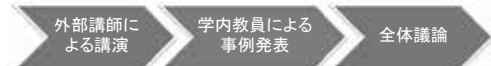
ポスターセッション当日の様子 (2009年)

- ポスター発表は9件
- 当初、ポスターセッション70分、最後に全体討論を30分行う予定だったが、盛り上がっていたこともあり、個別のポスター発表のみで終了



アクティブ・ラーニングについての課題

- アクティブ・ラーニングに関しては、下記の点が問題
 - 実はすでに取り入れている授業がある
 - 教員自身にアクティブ・ラーニングを行っているという自覚がない
 - そのような事例が大学内で共有されていない
- この問題を解決するために、外部講師による講演と学内教員による事例発表、議論を組み合わせる形でのFD研修を企画



学内FDにおけるAL研修

- 2015年2月にFD研修会を実施
- ALの理解を深めることを目的として設計
- 外部講師による講演
 - アクティブ・ラーニング型授業の概要と実践
- 学内教員によるポスターセッション
 - 京都外大におけるアクティブ・ラーニング(9件の発表)
- 参加者に、学内でもさまざまな実践が行われていることを知ってもらい、工夫や問題点などについて議論
- 参加者 55名(外部 5名含む)



反転授業に関する研修

- 2015年7月にAP主催で研修会を実施
- 反転授業に関する知識を獲得し、理解を深めることを目的として設計
- 外部講師による講演
 - ALを深めるための反転授業
- 分科会(英語、初習外国語、PBL)
 - 外部講師による事例紹介
 - 学内教員による事例紹介
 - 全体議論
- 徐々に具体的、関連性の高い話題を提供することで、教員自身の授業実践の設計・改善を促すきっかけに
- 参加者 52名



宿泊FDでの適用

- 毎年9月に開催している宿泊FDの全体会でも適用(2015年9月)
- 「京都外大における受験生増対策を考える」
- 外部講師による講演
 - 他大学の受験生増・広報に関する取組
- 京都外大における入試の現状・取組
- グループワーク
- 全体討論
- 入試の現状を知り、議論することを通して、当事者として問題を捉えられるように
- 参加者 104名



福島大学における FD

－「FD 宿泊研修を事例に」－

福島大学 総合教育研究センター 准教授 高森 智嗣

公益財団法人 大学コンソーシアム京都
第22回FDフォーラム「大学の教育力を発信する」
第4分科会「自大学の文脈を踏まえたFDの企画・運営」

福島大学におけるFD

－「FD宿泊研修を事例に」－



2017年3月5日（日）
福島大学
総合教育研究センター
准教授 高森 智嗣

本報告の趣旨

- 「全学」，「学類」，「個人」という3つの意識。
- これらのバランスを考慮しながら，どのようにFDを設計するか？
- 本学のFDの柱のひとつである授業アンケートと...
- その改訂プロセスで一定の役割を担ったFD宿泊研修を事例に...
- 福島大学における経験と知見を共有する。

大学紹介

- 学群，及び学生数：2学群・4学類・4234名
 - ・ 人文社会学群 3434名
 - 人間発達文化学類 (1238名)
 - 行政政策学類 (940名)
 - 経済経営学類 (984名)
 - 夜間主（現代教養）コース (272名)
 - ・ 理工学群 800名
 - 共生システム理工学類 (800名)

* () は学群の内訳

大学紹介

- 研究科，及び学生数：4研究科・257名
 - ・ 人間発達文化研究科 84名
 - ・ 地域政策科学研究科 26名
 - ・ 経済学研究科 46名
 - ・ 共生システム理工学研究科 101名
 - 博士前期課程 (80名)
 - 博士後期課程 (21名)

☞ 福島大学：4491名

* () は共生システム理工学研究科の内訳

大学紹介

- 教職員数
 - 教員数：235名
 - 職員数：445名
- 総合教育研究センター：5部門・6名
 - 高等教育開発部門：2名

* 特任教員を除く

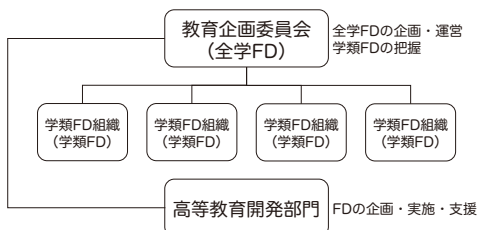
共通了解の形成

- Faculty Development (FD) とは？
 - 教授団の能力開発，教育・研究・管理運営・キャリア開発等，多岐にわたる（cf. Crow 1976）。
 - とりわけ，授業内容・方法等を中心とした教育改善の意味で用いられることが多い（cf. 質的転換答申 用語集）。

☞ 本報告では，後者に焦点を絞る。

Crow, M. L., Milton, O., Moonmaw, W. E., O'Connell, Jr. (eds) . (1976) Faculty Development in Southern Universities, Southern regional Education Board.

福島大学におけるFD体制



福島大学におけるFD（例）

- 全学FDとして
 - 各種アンケート調査
 - 共通教育アンケート
 - 授業アンケート
 - 卒業時アンケート
 - 卒業生・企業アンケート
- 学類FDとして
 - 独自の自己点検評価
 - FD研修会
 - 意見交換会
- 個人のFDとして
 - 授業アンケートの分析
 - 授業改善

課題にかえて ― 実情とホンネ

- 課題
 - ① 各レベルのFDの連関
 - ② 学類毎のFDの標準性
 - ③ FD参加状況の把握
 - ④ FDへの動機づけ
 - ⑤ 具体的な授業改善
- FDに参加してほしい人ほど...

福島大学のFDの改善に向けて

- 事例としての授業アンケート
 - 正式名称：教育改善のための学生アンケート
 - 前期・後期実施（隔年）
 - 各科目の集計結果は担当教員へフィードバック
- 課題
 - 教員側：アンケート結果の分析・活用への制約
 - 学生側：アンケート結果が活用されているかへの疑念
 - 共 通：相互不信

授業アンケート改訂への道のり

- 戦略としての「FD宿泊研修」
- FD宿泊研修とは
 - 福島大学に所属する学生と教職員が一堂に会し、授業改善等の大学教育の質の向上について1泊2日の期間、集中的に話し合う機会を設けることで、学生の声を取入れた教育改善、大学づくりを進めることを趣旨とした全学FD。

着想・手続き・ねらい

- FD宿泊研修の実績
 - H14・15年度のFD宿泊研修が新科目設置に繋がった。
☞ 制度を変えるポテンシャル。
- 手続き
 - 教育企画委員会におけるテーマの了承。
 - 学長、及び教育担当副学長の参加。
- ねらい
 - 授業アンケートからFDの在り方の改革への波及。

FD宿泊研修の概要

□ 講師による話題提供

- ・学内外の現状等について解説。
- ・テーマ設定について
- 従来は、FD宿泊研修が全学へ問題提起する構造。
- 今回は、全学の課題をFD宿泊研修で検討する構造へ。
- 内外から指摘が多く、教育企画委員会においても長らく審議事項であった授業アンケートをテーマに。

☞ イシュー・オリエンテッドを強調

13

FD宿泊研修の概要

□ グループワーク

- 具体的な授業アンケートの調査票、及び活用方法をアウトプットする。
- 初期配置は、教員だけのグループ、職員だけのグループ、学生だけのグループ。
- その後、ワールドカフェにて教・職・学混成グループでアイデアや意見を共有。

14

FD宿泊研修の概要

□ 各グループからの報告・成果の共有

15

その後の展開 — FD宿泊研修の成果

□ 授業アンケートの設問の改訂へ（現在進行中）

□ 授業アンケートの活用促進

- これまでアクセスに制約のあったアンケート結果のローデータを教員個人が扱えるように制度変更。
- アンケート結果に基づく「フィードバック・レポート」の作成を導入。

- ☞ フィードバック・レポートという外発的動機づけ。
- ☞ 教員がアンケート結果を受止めていることの明示。

16

まとめ — 自大学の文脈を踏まえたFDの企画・運営

- 全学FDの大きな柱のひとつは各種アンケート。
- 学類FDでもアンケートが参照されることが多い。
- 個人の授業改善においてもアンケート結果は貴重。
- 他方で、アンケートを軸としたFDは幅広すぎた。
- アンケートの活用をフィードバック・レポートの作成という形で全学FDとしてオーソライズ。

17

まとめ — 自大学の文脈を踏まえたFDの企画・運営

- ☞ 福島大学は「学類によって特性が異なる」という意識が根強い。
- ☞ 学類FDや教員個人のFD活動は多様。
- ☞ 他方、学類や教員によって濃淡があることも事実。
- ☞ おそらく、福島大学では、大規模な制度改革を行うよりも、（ある程度の標準化を図りつつ）既存の取組を活用・位置づけなおす方が有効。

18

今後の課題と展望

- 基本的な方針は、既存の取組のオーソライズ.
 - そのために...
 - 全学による、学類・個人レベルのFDの実施・参加状況等の把握.
 - 各学類におけるFDの責任主体の明確化，体制の整備.
 - 各主体による自身のニーズにあわせたFDの設計.
...が必要.
- 学類によるFDの設計と全学による把握の仕組みを構築中.

25

自大学の文脈を踏まえたFDの企画・運営

「自律性」をいかに「全学」に還元するか？

26

大規模私立大学におけるFDの企画・運営を考える

関西大学 教育推進部 准教授 岩崎 千晶

第22回FDフォーラムの分科会
「自大学の文脈を踏まえたFDの企画・運営」

2017年3月5日

大規模私立大学における FDの企画・運営を考える

関西大学 教育推進部
岩崎千晶
ciwasaki@kansai-u.ac.jp

岩崎千晶 (Chiaki Iwasaki)

- 所属
関西大学 教育推進部 教育開発支援センター准教授
- 専門
教育工学, 大学教育
大学をフィールドとした学習環境デザイン
- 所属学会
日本教育工学会, 大学教育学会, 日本教育メディア学会等
- 著書
『大学生の学びを育む学習環境デザイン』関西大学出版部 2014年
→関西大学全13学部の教員と共同執筆
『映像メディアのつくり方』北大路書房 2008年
- HP
<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~ciwasaki/>



Copyright © Chiaki Iwasaki All Rights Reserved

関西大学



- 学生数：約28000名
- 学部数：13学部
- 専任教員数：約700名
- キャンパス数：5キャンパス（吹田・梅田・高槻X2・堺）
- 付属幼稚園，初等部，中等部，関西大学北陽，
関西大学第一中学・高校

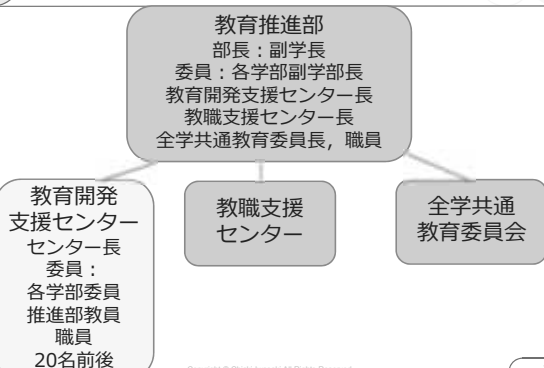
教育推進部 教育開発支援センター (CTL)

- 全学の質向上を担う教育推進部の設置（2008）
- 教育推進部への専任教員の配置（2009）
- 4名の専任教員（教授3名，准教授1名）が所属
- <http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/>



Copyright © Chiaki Iwasaki All Rights Reserved

教育推進部の構成



Copyright © Chiaki Iwasaki All Rights Reserved

教育開発支援センターのFD活動

1. セミナー形式
 - FDフォーラム(年2回開催)
 - 教授会での話題提供 (都度開催)
2. レクチャー & ワークショップ形式
 - 新任教員研修(5月実施, 3年以内の教員)
 - 日常的FD懇話会 (都度開催, 年5回程度)
 - ランチョンセミナー (都度開催, 年10回程度)
 - 学部の依頼による研修 (都度開催)
3. 授業コンサルティング(都度実施)
4. 授業評価アンケート(年2~4回実施)

Copyright © Chiaki Iwasaki All Rights Reserved

教育開発支援センターのFD活動

5. 補助金事業 (Teaching and Learningの支援)
6. 学内研究費(年1度申請)
7. 刊行物・メルマガ
 - 関西大学高等教育研究 (年1回発行)
 - ニュースレター (年3回発行)
 - メルマガ (月1回発行)
 - FDのためのハンドブック
 - アクティブラーニングデザインブック
 - グループワークの達人
 - ルーブリックの活用ガイド

Copyright © Chuo University All Rights Reserved.

6

教育開発支援センターのFD活動

1. セミナー形式
 - FDフォーラム(年2回開催)
 - 教授会での話題提供 (都度開催)
2. レクチャー&ワークショップ形式
 - 新任教員研修(5月実施, 3年以内の教員)
 - 日常的FD懇話会 (都度開催, 年5回程度)
 - ランチョンセミナー (都度開催, 年10回程度)
 - 学部の依頼による研修
3. 授業コンサルテーション(都度実施)
4. 授業評価アンケート

Copyright © Chuo University All Rights Reserved.

7

1. セミナー形式

(1) FDフォーラム(年2回開催)

対象: 全学の教職員 (非常勤含)

目的: 高大接続、教育の質保証などの全学に関わるテーマを扱い、その知見を深める

構成: 基調講演、質疑応答、パネル登壇 (3時間~4時間程度)

Copyright © Chuo University All Rights Reserved.

8

1. セミナー形式

(2) 教授会での話題提供

- IRに関する説明 (例: 入学時調査の結果報告)

対象: 学部の教員

目的: 学部からの依頼に応じたテーマ (IR, ルーブリック活用) を扱い、その知見を深める、学部単位でFDをすすめる材料を得る

構成: 教授会の1議題として (10~15分程度)

Copyright © Chuo University All Rights Reserved.

9

教育開発支援センターのFD活動

1. セミナー形式
 - FDフォーラム(年2回開催)
 - 教授会でのミニセッション
2. レクチャー&ワークショップ形式
 - 新任教員研修(5月実施, 3年以内の教員)
 - 日常的FD懇話会 (都度開催, 年5回程度)
 - ランチョンセミナー (都度開催, 年10回程度)
 - 学部の依頼による研修
3. 授業コンサルテーション(都度実施)
4. 授業評価アンケート

Copyright © Chuo University All Rights Reserved.

10

2. レクチャー&ワークショップ形式

(1) 新任教員研修(GW前後に1度)

対象: 3年以内の教員

目的: 関西大学の教育・学習支援に関する知見を深めるとともに、教員同士で話し合う関係性を育む

構成: グループワーク、ミニレクチャー (半日) & 情報交換会

Copyright © Chuo University All Rights Reserved.

11

2. レクチャー＆ワークショップ形式

(2) 日常的FD懇話会（年3回程度）

対象：全学の教職員（夕方実施することが多く、職員も多い）（非常勤含）

目的：教育学習に関するテーマを扱い、その知見を深め、自身の授業でFDをすすめる材料やきっかけを得る

テーマ：授業設計とシラバスを考える、

構成：ミニレクチャー、グループワーク（60分～90分程度）（複数キャンパスあるため動画配信も実施）

Copyright © Choshi University All Rights Reserved.

12

日常的FD懇話会テーマ 例

- ルーブリック評価とレポート課題の提示方法
- ICT活用型教育の報告会
- 教学IRが果たす役割と今後の展開

Copyright © Choshi University All Rights Reserved.

13

2. レクチャー＆ワークショップ形式

(3) ランチョンセミナー（都度開催、年10回程度）

対象：全学の教職員（非常勤含）

目的：授業改善に関する身近なテーマを取り上げ、その知見を深める、自身の授業でFDをすすめる材料や機会を得る

構成：ミニレクチャー、個人ワーク（お昼休み30～60分程度）（複数キャンパスあるため動画配信も実施）

Copyright © Choshi University All Rights Reserved.

14

ランチョンセミナーテーマ 例

- 知って得するルーブリック活用術～ルーブリック評価を体験しよう～
- 外国語の読解能力を評価する方法
- クリッカーを使って学生の声を引き出した授業を！
- グループワークをはじめませんか？

Copyright © Choshi University All Rights Reserved.

15

2. レクチャー＆ワークショップ形式

(4) 学部の依頼による研修

対象：学部の教職員（非常勤含）

目的：学部からの依頼に応じたテーマを扱い、その知見を深める、学部でFDをすすめる材料や機会を得る（初年次教育におけるルーブリック活用・アクティブラーニング等）

構成：ミニレクチャー、グループワーク（2時間程度）

Copyright © Choshi University All Rights Reserved.

16

教育開発支援センターのFD活動

1. セミナー形式
 - FDフォーラム(年2回開催)
 - 教授会でのミニセッション
2. レクチャー＆ワークショップ形式
 - 新任教員研修(5月実施、3年以内の教員)
 - 日常的FD懇話会（都度開催、年5回程度）
 - ランチョンセミナー（都度開催、年10回程度）
 - 学部の依頼による研修
3. 授業コンサルティング(都度実施)
4. 授業評価アンケート

Copyright © Choshi University All Rights Reserved.

17

3. 授業コンサルテーション(都度実施)

対象：全学の教員（非常勤含）

目的：各教員の依頼に応じたテーマ（多人数講義、講義スタイル、LMS）を扱い、その知見を深める、自身の授業でFDをすすめる材料や機会を得る

構成：個別相談（60～120分程度X??回）

Copyright © Chukyo University All Rights Reserved.

18

教育開発支援センターのFD活動

1. セミナー形式
 - FDフォーラム(年2回開催)
 - 教授会でのミニセッション
2. レクチャー＆ワークショップ形式
 - 新任教員研修(5月実施、3年以内の教員)
 - 日常的FD懇話会（都度開催、年5回程度）
 - ランチョンセミナー（都度開催、年10回程度）
 - 学部への依頼による研修
3. 授業コンサルテーション(都度実施)
4. 授業評価アンケート

Copyright © Chukyo University All Rights Reserved.

19

4. 授業評価アンケート

- 中間アンケート（WEB実施）
 - 全科目共通
 - 1共通設問8問、自由記述
- 最終アンケート（紙のみで実施）
 - 5段階評価
 - 設問19問、自由設問1問
 - 自由記述

Copyright © Chukyo University All Rights Reserved.

20

教育開発支援センターのFD活動

5. 補助金事業（Teaching and Learningの支援）
6. 学内研究費
7. 刊行物・メルマガ
 - 関西大学高等教育研究（年1回発行）
 - ニュースレター（年3回発行）
 - メルマガ（月1回発行）
 - FDのためのハンドブック
 - アクティブラーニングデザインブック
 - グループワークの達人
 - ルーブリックの活用ガイド

Copyright © Chukyo University All Rights Reserved.

21

5. 補助金事業

- 2009～2011年 大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム「3者協働型アクティブ・ラーニングの展開」
- ラーニングアシスタント(学部学生スタッフ)を導入した初年次教育を主軸としたALの展開
- 2012年 私立大学教育研究活性化設備整備事業「『考動力』を育む学習環境「コラボレーションコモンズ」の構築」によるコラボレーションコモンズの開設
- 授業外のALを支える学習環境の構築
- 2012～2016年 大学間連携共同教育推進事業「『考え、表現し、発信する力』を培うライティング／キャリア支援」
- ライティング力を高める…ライティングセンターの設置
- 2014～2020年 大学教育再生加速プログラム「21世紀を生き抜く考動人 Lifelong Active Learnerの育成」
- ルーブリックの開発、アクティブラーニングの評価

Copyright © Chukyo University All Rights Reserved.

23

5. Teaching and Learningの支援へ

- 初年次教育にグループワークのファシリテーションを行うラーニングアシスタント(学部生スタッフ)の導入
- 授業外のALを支える学習環境「ラーニングコモンズ」の構築
- ライティングセンターの設置
- ルーブリックの開発、アクティブラーニングの評価

グループワークにおけるLAの活動事例 1

- 教員から推薦を受けた当該科目の履修生が研修を受けて、初年次教育のグループワークをサポートする。
- 同じ議論を繰り返している
→ 書記に力を入れ、ボードを見て議論を整理
- 無言…メンバーの顔が暗い…
→ 今の状況を確認、新しい意見の提供、創発促進
- 中身が薄いけれど、会話は活発！



グループワークにおけるLAの活動事例 2

- 意見はたくさん出たが、合意形成できない、論理的に整理できない
→ 主張、理由、根拠について、一緒に整理する
- 意見が対立、意見が異なり、合意形成できない
→ 双方の意見を聞いたうえで、共通点を探ることができるように質問をする



教員にとっての効果

- 各グループに対してきめ細かい指導
- LAからの報告を受けて、各グループへの介入
- グループで学びあう関係性が形成
- プレゼン発表内容に対する論理的な構成
- LAとの意見交換により授業改善箇所の焦点化
- アクティブラーニングデザインブックの作成

図書館ラーニングコモンズ (2015～) 約300席

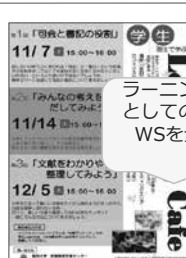
- 正課（アクティブラーニング）をサポート

ワークショップエリア
(100名程度収容)ライティングエリア
レポート・論文相談

ラーニングCafé 教育プログラムの設計

専門知が必要
であるテーマ

教員

ロジカルシンキング
リーディング・論証プレゼン

学生スタッフ

司会と書記の役割
みんなの考えをだしてみよう
文献をわかりやすく整理してみようラーニングアシスタント
としての経験知をもとに
WSを企画運営できる
テーマ

ライティングエリア

- 大学院生博士課程のTAが学部生のドキュメント（レポート、プレゼン、レジメ）作成支援

- 月～金11時半～17時
- 博士課程後期課程のTA
- 40分のセッション
- WEB予約、予約なしでもOK



- 自律的な書き手の育成を目指したレポート作成に関する支援

学生から寄せられた相談内容

カテゴリー	コード	件数		
確認(259)	全般	175	文章構成(176)	レポートの型 60
	部分	10		PREP 14
	修正点	20		タイトル見出し 5
	基本的な書き方(執筆後)	54		問いと主張 11
執筆準備(111)	基本的な書き方(執筆前)	89	文章利用(53)	根拠 13
	課題の理解	12		論理の展開 39
	発想	10		まとめ方 28
	誤字脱字	6		補足 2
文章表現・表記(84)	語法	16	研究方法(11)	反論 1
	句読点	2		比較 3
	文の長さ	2		文庫の探し方 7
	文字数の増減	11		文庫の読み方 1
	わかりやすさ	15	レイアウト(14)	引用の方法 35
	言葉遣い(表記表現含む)	32		文庫一覧・注釈 9
				研究の方向性 4
				研究方法全般 4
			PC操作(4)	調査の方法 1
				分析の方法 2
				表紙 3
				目次 2
				図表 7
				フォント 2
				ワープロ 2
				エクセル 1
				パワーポイント 1

資料千品、編集利恵子、小林充道、本村康弘(2013)『ライティングセンターにおける相談記録の分析』
『ライティングセンター』(2013)『ライティングセンターにおける相談記録の分析』
『ライティングセンター』(2013)『ライティングセンターにおける相談記録の分析』

課外の学習支援で蓄積された課題を正課へつなげる

- ・ライティングラボの特命教員3名
- ・正課(授業)を担当する教員と正課外(学習支援)担当者との連携
- ・出前授業
- ・教員からラボへの連絡(レポート課題・目的・希望する指導のポイント)
- ・ラボを訪問した学生の証明書発行
- ・レポート作成ワンポイント講座
- ・ルーブリックの開発・活用支援

課外の学習支援で蓄積された課題を正課へつなげる

- ・正課の課題を課外で補足
 - ライティングラボに寄せられた課題は、レポート作成における学生の置き
 - 「文章力を磨く」、「レポートを作成する」などを担当している教員、レポートを課す教員にフィードバック

教育開発支援センターのFD活動

5. 補助金事業 (Teaching and Learningの支援)
6. 学内研究費
7. 刊行物・メルマガ
 - 関西大学高等教育研究 (年1回発行)
 - ニュースレター (年3回発行)
 - メルマガ (月1回発行)
 - FDのためのハンドブック
 - ・アクティブラーニングデザインブック
 - ・グループワークの達人
 - ・ルーブリックの活用ガイド

6. 学内研究費 (教育研究高度化促進費)

目的：国際化戦略の促進、教育改革拠点の形成・教育システムの改革促進、国家戦略と密接に関連する研究課題の推進など、大学が推進する特定課題の早期達成を促進すること

対象：全学の教員(が実施代表者となる)共同研究あるいは複数の教員による取組

実施期間：1～3年

支給額：1件あたり 200万円～500万円

大学が推進する特定課題 例

- ① 学士力の向上を促進するもの
 - ・学生の外国語能力や国語力の向上のための実践的な取組
 - ・学生の数的把握能力と論理展開力の向上に向けた取組
 - ・学習時間確保のための取組
 - ・入学前教育や複数キャンパス間での共同利用等を含めたe-Learningの活用
 - ・教学IRの推進に向けた取組
- ② 大学院教育の実質化・学位の質的保証を促進するもの
 - ・特色あるコースワーク創生を目的とする取組
 - ・集团的指導体制を実質化するための取組
 - ・修了者のキャリア・パス形成を促進する取組
 - ・大学院における社会人教育に関する取組

教育開発支援センターのFD活動

5. 補助金事業 (Teaching and Learningの支援)

6. 学内研究費

7. 刊行物・メルマガ

- 関西大学高等教育研究 (年1回発行)
- ニュースレター (年3回発行)
- メルマガ (月1回発行)
- FDのためのハンドブック
 - アクティブラーニングデザインブック
 - グループワークの達人
 - ルーブリックの活用ガイド

Copyright © Chuo University All Rights Reserved.

36

7. 刊行物・メルマガ

対象：全学の教職員

目的：FDに関わる活動の広報

CTLからFDに関わる活動を提供・共有

各教員からFDに関わる活動を提供・共有

紀要：FDの成果を共有、教育研究高度化促進費の成果、各教員の教育実践事例

ニュースレター：活動やFDの成果・情報を共有

メルマガ：即時性、広報

Copyright © Chuo University All Rights Reserved.

37

FDのためのガイドブック

• CTLからの情報提供



Copyright © Chuo University All Rights Reserved.

38

教育推進部における全学的な質の保証

- 2014年 IR準備室
- 2015年 教学IR立ち上げ
(副学長, 教育推進部 (森朋子), 入試, キャリア, 学長課等)
- 2015年4月 入学時調査
(速報値・教授会説明)
- 2016年3月 卒業時調査

39

FDをデザインするにあたって

- 目的, 参加者の前提条件を踏まえて…
- さまざまな方法を駆使して (読み物, 動画配信, リアルタイム…)
- 同僚性と専門性を組み合わせて
- 複数キャンパスでの展開
- FDにはTeaching and Learningの視点が必要！
 - Teaching and Learningを改善する行為主体は教員だけではない。学生スタッフ, 学生！
 - 学習支援への展開も考慮したFD

Copyright © Chuo University All Rights Reserved.

40

京都産業大学における FD / SD の取り組みについて

京都産業大学 教育支援研究開発センター事務局 事務長

物部

剛

KYOTO SANGYO UNIVERSITY

京都産業大学における FD/SDの取り組みについて

京都産業大学
学長室課長(戦略企画担当)・IR推進室長・
教育支援研究開発センター事務長
物部 剛(tyama@star.kyoto-su.ac.jp)
2017/3/5 第22回FDフォーラム・第4分科会

KYOTO SANGYO UNIVERSITY

本日の内容

- 大学紹介
- 本学のFDの特徴
- FDへの事務職員の関わり
- 2016年度の全学FD/SD研修会
- むすびに

KYOTO SANGYO UNIVERSITY

大学紹介

京都産業大学は、京都市北部に位置する一拠点総合大学

- 創 立／1965（昭和40）年
- 学 生 数
 - ・学部学生／12,806人（男性8,794人／女性4,012人）
 - ・大学院生／ 219人（男性 149人／女性 70人）
- 教育職員数／414人（男性324人／女性90人）
- 事務職員数／456人（男性183人／女性273人）
- 学 部／8学部（2017年度から9学部）
 - 経済学部、経営学部、法学部、外国語学部、
 - 文化学部、理学部、コンピュータ理工学部、
 - 総合生命科学部、現代社会学部（2017年4月開設）

KYOTO SANGYO UNIVERSITY

大学紹介

- 研 究 科（10研究科）
 - 経済学研究科、マネジメント研究科、法学研究科、外国語学研究科、
 - 理学研究科、工学研究科、先端情報学研究科、生命科学研究科、
 - 法科大学院（募集停止）、経済学研究科(通信教育課程)
- 研究所・研究センター（5研究所・6研究センター）
 - 世界問題研究所、日本文化研究所、社会安全・警察学研究所、タンバク質動態研究所、先端科学技術研究所、鳥インフルエンザ研究センター、ミツバチ産業科学研究センター、植物ゲノム科学研究センター、総合学術研究所、構造生物学研究センター、生態進化発生学研究センター、グローバル公共財研究センター

KYOTO SANGYO UNIVERSITY

大学紹介(教育支援研究開発センター)

【FD関係組織の変遷】

- 1998年 自己点検・評価運営委員会
 - ・「自己点検評価報告書」作成
- 2000年
 - ・「学生による授業の相互評価アンケート」開始
- 2003年 教育エクセレンス支援センター設置(事務局:学長室)
 - FD推進委員会設置
 - 【目的】
 - 本学教員の教育力を高め、FD活動を支援し、
 - 教育の質のエクセレンス化を支援し、図ること
- 2009年 教育支援研究開発センター開設準備室設置

KYOTO SANGYO UNIVERSITY

大学紹介(教育支援研究開発センター)

2010年 教育支援研究開発センター設置

(事務局:教育支援研究開発センター事務局)

【目的】

教育の質向上に関する全学的な方針の策定及び
総合的推進を図ること
全学の教育改善・開発の支援推進と、そのために
必要な調査、分析、研究活動を行う

2012年 事務局が学長室へ再編

(事務局:学長室(教育支援研究開発担当))

2016年 教育支援研究開発センターの委員会組織を再編。

(事務局も再編し、教育支援研究開発センター事務局を設置。)

本学のFDの特徴

- 「対話」を重視したFD活動

課題①：授業評価アンケートの実施率・回答率の低迷
課題②：「第1回学生と教職員が共に考えるFDフォーラム」(2010)

- 学生が考える「よい授業」＝授業のやり方がよい授業
- 教員が考える「よい授業」＝コンテンツがよい授業

↓

教授法、授業進度に関する学生と教員間のコミュニケーションが必要

本学のFDの特徴

- 「対話」を重視したFDへ転換（2010年度～）

- 授業アンケートの改変（2011）
 - ①「教員—学生間の対話シート」（教員—学生）
 - ②「学習成果実感調査」（学部内教員—教員）
- 学生FDスタッフ「京産共創プロジェクト」（学生—教員—職員）(2011)
- 各種FD/SD研修会を対話形式に（教員—職員、先輩教員—新任教員等）(2011)
- 「学部まわり」（学部長等—教育支援研究開発センター教職員）（2010）

本学のFDの特徴

- 授業アンケート：「教員—学生間の授業に関する対話シート」

(1) 目的：
・各科目における授業の進め方等について、教員と学生間の対話を促進する
・当該学期期間中に学生からの声に対して、フィードバックをし、授業の進め方の調整を行う
※学生と対話をするのが目的であるため、教員独自で作成したシート等でもOK
※授業を評価するためのシートではない

(2) 対象科目：原則、非常勤講師を含む全教員・全科目

(3) 調査設計：各教員が、学生へのフィードバックの有無、学生から出された対話シートの実施結果の授業への反映方法を「報告書」に記入し、所属学部事務室へ提出する。

対話シート等 → 集計 → 学生へのフィードバック → 授業の進め方の調整 → 実施状況報告

全科目 → 各教員 → 各教員-学生間 → 各教員 → 各教員

本学のFDの特徴

対話シートを実施した教員の声

- 学生からの質問や学生同士の教え合いがより活発に行われるようになった（経済学部）
- 学生がわかりにくいところを、ためらわずに聞くようになった（総合生命科学部）
- 授業中の雰囲気も良くなり、学生も以前に比べてより集中しているように見受けられた（理学部）
- 学生からの要望や意見に迅速・丁寧に対応することで、信頼関係を醸成できていると感じる（法学部）
- Many students have focused on reading more than before. (外国語)

全ての学部において
→ 対話シートを実施した科目については
8割以上がフィードバックまで実施している

学生の声に対してフィードバックする
重要性を理解して実施している教員が多い

対話のフィードバック率 平成28年度秋学期

学部	フィードバック率 (%)
経済学部	90
経営学部	95
法学部	85
総合生命科学部	90
理学部	80
工学部	95
薬学部	90
看護学部	95
国際生命科学部	90
教育学部	95

本学のFDの特徴

教員実施率の増加が顕著な学部

外国語学部の教員実施率
→ 8割を超える教員が対話を実施

学部として、対話シートへの意識が向上してきている。

今後の展開

大学全体の教員実施率
→ 実施率が増加している
教員全体としては約6割の実施率
専任教員の実施率は7割を超える

大学全体として、さらに対話に対する意識向上をめざしていく

教員実施率（外国語学部）

年度	実施率 (%)
H27春	40
H27秋	40
H28春	80
H28秋	85

教員実施率（大学全体）

年度	実施率 (%)
H27春	45
H27秋	45
H28春	60
H28秋	60

本学のFDの特徴

- 授業アンケート：学習成果実感調査

(1) 目的：
①学生による自分の成長の実感に関する自己評価を行う
②京都産業大学として提供すべき授業の質が実現されているか否か等の現状を把握し、学部でのFDやカリキュラム改善等に活用する

(2) 対象科目：各学部の方針に基づき選定

(3) 調査設計：①全学統一設問（出席率、シラバスの活用状況、授業時間外学習時間）、②学部独自設問、③教員独自設問、④自由記述

年間計画 → 調査 → 中間報告 → 公開授業 & WS → 調査 → 結果分析・改善計画

学部等教授会「重点テーマ」対象科目の選定 → 対象科目 → 学部長 → 結果 フィードバック

学部 → 対象科目 → 学部長 → 結果 フィードバック

KYOTO SANGYO UNIVERSITY

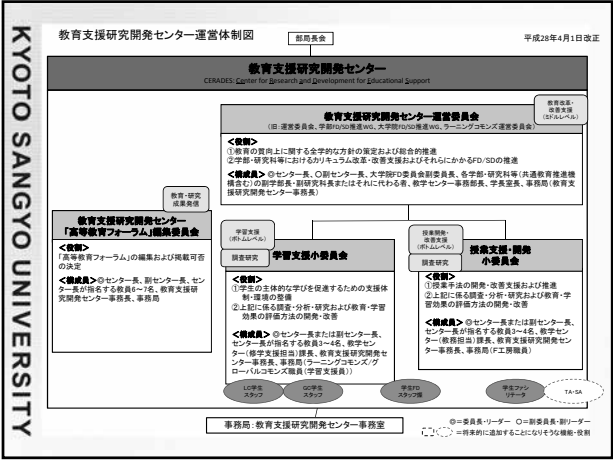
本学のFDの特徴

- ・「学部まわり」（2010年度～）
教育支援研究開発センター教職員が各学部等を訪れ、学部執行部（学部長、学部FD/SD推進ワーキンググループ委員（副学部長）、学部長補佐（職員））とざくばらんに意見交換を行う取り組み。
8学部1センター×年2～3回程度実施
- ・「セラデス勉強会」（2011年度～）
学長、副学長等大学執行部と教育支援研究開発センター教職員間で行う勉強会を年5回程度（不定期）実施。
学長の教育改革に向けたビジョンおよび高等教育政策の動向の共有を行うとともに、学部まわりの共有を行う。（現在でいう「SD」を実施。）

KYOTO SANGYO UNIVERSITY

本学のFDの特徴

- ・「学部FD/SD推進ワーキンググループ」への機能移管
- ・副学部長クラスで構成するWGを月1回の定例開催とし、全学的なFDの方向性について、現場の意見を反映させながら、検討を行う仕組み。ワーキングということを活かし、多くの担当事務職員が参加することが可能となる。
- 現在の教育支援研究開発センター運営委員会及び小委員会の設置の礎となる。



KYOTO SANGYO UNIVERSITY

FDへの事務職員の関わり

- ・担当事務職員による情報収集
 - ①「教員—学生間の対話シート」の結果および「学習成果実感調査」の結果から、教員と学生の関係が良好な授業の情報が発掘。
 - ②「公開授業」に職員が出向き、学部における授業の進め方等の情報を収集。
 - ③本学に設置されているファシリテーションを推進する「F工房」への教員からの授業でのファシリテーション導入相談や、実際の授業への参観による情報の収集。
 - ④各学部で実施している学部FDの情報を収集。
 - ⑤教育支援研究開発センター事務局がになう高等教育政策動向の情報を収集。
 - ⑥アクティブラーニングの事例を収集。

KYOTO SANGYO UNIVERSITY

FDへの事務職員の関わり

- ・情報の共有から研修会の実施へ

- ① 収集した情報を担当者が整理を行う。
- ② 週1回開催の「クラッチ」にて、センター長、副センター長と担当事務職員での情報共有を行い、担当者から企画提案を実施。
- ③ クラッチでの企画案を運営委員会小委員会で審議・承認。
- ④ 小委員会から運営委員会に上程・決定
- ⑤ 運営委員会での決定の上、全学FD／SD研修会を実施

KYOTO SANGYO UNIVERSITY

2016年度の全学FD／SD研修会

- ・2016年度の特徴
- ・F工房が「アクティブラーニングの事例集」発行を目的として、各授業でのアクティブラーニングの情報を収集し、実際の授業を見学。
- ・「改訂版アクティブラーニング集」の内容の全学共有と授業の工夫の共有化を目的として、全学FD／SD研修会の企画を提案。
- ・企画案をもとに、事例発表者に依頼。

2016年度の全学FD／SD研修会

- ・ 開催概要：
 - － 日時：2016年12月7日15時～16時30分
 - － 参加者：39名（教育職員27人、事務職員12人）
 - － 内容：分科会形式により実践報告と討議
- ・ 参加者の声：
 - － 「自分の授業に取り入れられそうな工夫を聞いた」
 - － 「他学部の先生の話聞いて多様な取組を知ることができた」
 - － 「学生の学習状況とアプローチ方法を知ることができた」
 - － 「課題の与え方など仕掛け作りが大事だと感じた」
- ・ 特記事項：
 - － 教育プログラムを支援する事務職員からの質問や意見が多く見られた。

2016年度の全学FD／SD研修会

- ・ 実施内容：分科会毎の実践内容報告とグループ討議
- [分科会A：講義]
- 経営学部教授 上野継義／経営史入門（1年次）
文化学部教授 鬼塚哲郎／南アメリカ文化論（3年次）
※コーディネータ：小委員会委員
- [分科会B：初年次ゼミ]
- 法学部教授 中井歩／プレップセミナー、法教育演習（1年次）
総合生命科学部教授 横山謙／フレッシュヤーズセミナー（1年次）
文化学部特約講師 草野友子／入門セミナーA（1年次）
※コーディネータ：F工房担当事務職員
- [分科会C：専門ゼミ]
- 経済学部教授 西村佳子／演習Ⅰ（2年次）、Ⅱ・Ⅲ（3年次）
外国語学部准教授 田畑恒平／ヨーロッパ言語研究演習Ⅰ・Ⅱ（3年次）
コンピュータ理工学部准教授 荻野晃大／コンピュータ理工学特別研究Ⅰ（3年次）、ⅡA・ⅡB（4年次）
※コーディネータ：F工房担当事務職員

むすびに

- ・ 教育・研究の企画・実施においては、それらの理解をもった事務職員の存在と育成が重要な課題となっている。
- ・ 本学では、中長期計画などグランドデザインの検討においても、教育職員と事務職員が同じテーブルで対等な議論を交わすなど、教職協働の風土を育成してきている。
- ・ 中教審・大学教育部会(第44回)においても、事務職員の在り方が議論されているが、本学では、従来からFD/SDを同時開催するなど、教育職員と事務職員の協働を推進する活動を継続して実施している。
- ・ 今後は、教育改善のためには、さらなる事務職員の「大学職員」としての能力向上が必要不可欠であるとの認識の上、SD活動・FD活動を推進していきたい。

